自由都市共和制の町「見付」先人達の気概

文・小山のぶひろ

▲著者　小山のぶひろ氏。

自由都市共和制の町「見付」

あまり知られていないが、見付は、天文十（一五四一）年から約十年間、「自由都市共和制」の町であった。当時、同様に自由都市共和制だった町は、有名な堺（和泉）、平野（摂津）、桑名（伊勢）など数えるほどしかなく、まさに見付は、全国でも類例の少ない特異な歴史を持っているのである。

自由都市共和制となった背景

今川義元が今川家の家督を継ぐ際に起きた内乱を「花蔵の乱」という。正室の生んだ五男の義元と側室の生んだ三男の玄広恵探との争いであった。戦いは義元が勝利に終わったが、当時、見付を支配していた堀越氏は、乱に際して玄広恵探側についたため、義元から攻められ、見付端城において滅亡した。以後、見付は、今川義元の直轄領となり、代官が派遣されることとなったが、見付の町人百姓は、百貫文の年貢に五十貫文多く納めることを条件に、義元の代官を拒否する訴訟を起こした。

叛乱を鎮圧した直後で政治的基盤の弱い義元は、見付に対して強い支配を行なうことができず、見付府一円の支配を百姓町人が行なうというこの訴えを認めたのである。これによって町人百姓による自治都市共和制が展開されることとなった。

町政は惣社（淡海国玉神社）の地で行われ、町人の代表者として米屋弥九郎、奈良二郎左衛門尉という名が伝えられている。

次第に力をつけてきた義元は「楽市楽座」よりも過激な「自由都市共和制」政策を改め、領国支配・商業支配への力を強めていった。

そして、ついに見付に代官を派遣して直接支配を開始し、見付の「自由都市共和制」はわずか十年程度で幕を下ろした。しかしながら、短い期間であったものの、戦国大名今川義元に抗し、「自由都市共和制」を獲得した当時の見付の先人達に、自分達の町を自分達で納めようとする強烈な気概、郷土への思いを感じずにはいられない。

この時期には、見付の町が題材となった謡曲「舞車」や狂言「磁石」も創作されるとともに、見付は、京と関東及び遠江国内の各地域との経済・文化交流の結節点としても栄えていた。まさに当時の見付は、政治的・文化的に自主独立の気概にあふれ、経済的にも繁栄し、かくも光り輝いていたのである。

先人たちの気概に触れて

現代、政治的にも経済的にも文化的にも東京一極集中が進み、地方の特色が薄れていくとともに、都市と地方の格差が広がっている。ゆえに、今こそ自分たちの町のことを自分たちで決めていく気概が地方には求められている。軽々しい比較は厳に慎むべきではあるものの、これからの地方分権の時代、この見付の先人たちの自主独立の気概に我々は見習うべきものがあるように思う。

また、現代日本においては、投票率が低下し、政治を他人事のように考える風潮がある。目先のことや選挙のことしか考えない政治家ばかりが増えてしまい、政治不信が高まってしまったことがその原因の一つである。政治家の側は大いに反省しなければならないが、一方で、政治と関わることを避ける人が増えれば、政治に特定の利益を持つ人々がその存在感を増していくだけなので、政治も社会も決して良くはならない。だからこそ政治に対しては、有権者一人一人の当事者意識を高めていく必要がある。この点についても、この見付の先人たちの気概に学ぶべきものがあるように思う。